

鄭章淵著

『韓国財閥史の研究』

——分断体制資本主義と韓国財閥——』

日本経済評論社 2007年 vi+433ページ

あ べ まこと
安 倍 誠

これまで日本では韓国の財閥に関する多くの研究書や一般書が刊行されてきた。しかし、不思議なことに財閥の発展過程全体を俯瞰できるような著作は存在しなかった。本書は日本語で出版された初めての本格的な韓国財閥の通史である。著者は解放後の韓国現代史を、生成期（1950年代末まで）、基礎形成期（60年代）、発展期（70年代）、成熟期（80年代）、爛熟期（90年代）、淘汰期（97年の通貨危機以降）に区分し、それぞれ1章をあてて各時代における財閥の展開過程を論じている。

本書の最大の魅力は豊富な事実の叙述にある。各時代における政府の政策とその財閥への影響、財閥の事業拡大・再編過程と経営体制の変化など多岐にわたっており、特に主要財閥の個別の動きについても、一般にはあまり知られていないエピソードを含め、詳細な事実を提示している。加えて、韓国国内での財閥研究および財閥をめぐる諸議論の紹介にも力を注いでいる。著者が指摘するように、1990年代以降、韓国国内では財閥に関する議論が活発になったが、それを反映して財閥に関する研究書・一般書の刊行が急速に進んだ。著者は多数のこうした出版物、さらには財閥の社史を精力的に渉猟し、重量感のある一冊の通史にまとめあげた。この著者の力量は高く評価されるべきであろう。巻末の参考文献リストも財閥に関する書誌情報として非常に有用である。

もちろん、本書で気になる点がないではない。第1には、著者の問題意識が本書の叙述全体を貫徹しているかどうかという点である。序章の「研究の方法と課題」で著者は、関心の中心は財閥の歴史そのものではなく「分断体制資本主義」としての韓国経済の展開過程にあるとする。分断体制とは、始発段

階において植民地統治の終焉による朝鮮経済の日本経済圏からの離脱と、朝鮮半島の南北の分断という「二重の分断」に規定された体制を指す。著者のねらいは韓国経済の担い手である財閥の展開過程を分析することを通じて、分断体制資本主義の生成・発展・転化のプロセスを明らかにすることにある。しかし、本書の後半では分断体制と財閥の関係は各章末に「付け足し」のように言及されるのみになっている。現実の財閥の成長過程が分断体制とは別の様々な要素に規定されるようになってきていることを反映していると思われるが、問題設定と議論の展開をもう少し厳密に関係づける作業をおこなえば、より完成度の高い著作になったのではないと思われる。

第2には、第1の点とも関連するが、財閥の成長と韓国経済の発展の関係を著者がどのように捉えているかという点である。序章で著者は、財閥の内部取引は個々の財閥にとっては合理的な選択であったかもしれないが、「国民経済全体の資源配分の効率性を考慮すると、財閥こそは貴重な資源を浪費する元凶以外の何ものでもない」（5ページ）と断じている。その後の各章では財閥が韓国の高度経済成長期に積極的な事業展開をおこなっていた過程を詳細に論じており、財閥が経済成長を牽引した側面があることを読者に印象づける。財閥の存在が韓国経済の発展に果たしてきた役割（プラスにせよマイナスにせよ）について、著者が時代ごとにどのように整理しているのか、今ひとつははっきりしていないことが惜まれる。

しかし、以上の点は先に指摘した本書の魅力からすれば些末なことかもしれない。本書から読者は、政府の各種政策に支えられて成長を遂げた韓国の財閥が、やがては自律的に経営を展開するようになり、ついには一国の枠を超えてグローバルな展開をみせるようになるものの、通貨危機を経て抜本的な構造調整を余儀なくされるに至る歴史のダイナミクスを実感することができる。研究者や大学生はもちろん、韓国財閥に関心のある一般読者に至る広い層に一読を勧めたい。

（アジア経済研究所新領域研究センター）